

単語声調体系の定式化（3）

—蘇州方言—

岡田 英俊

0 序

漢語蘇州方言の音調体系の定式化を行う。§1と§2において、広用式変調を扱う。§3と§4において、窄用式変調を扱う。

前稿（岡田(1995)）において、上海方言の音調体系を、単語声調体系であると認定した。蘇州方言の音調体系も、単語声調体系の一種であると認定できる。しかし、上海方言ほど整然とした体系ではない。

蘇州方言の音調体系に関する論考は、上海方言の場合と同様、多数、存在する。しかし、本稿では、前稿と同じく、1つのデータに依拠し、現行の枠組みでの分析を示すのみとする。データは、宮田一郎等(1984)による。他の分析との比較や、異なるデータの検討は、別の機会に行う。ただし、§4.4において、窄用式変調の捉え方に関し、Ballard(1987, 1988)に言及する。

1 データ（広用式変調）

まず、広用式変調を扱う。この§1において、データを挙げる。データは、すべて、宮田一郎等(1984: 39-49)による。分析は、§2において行う。

単独の1音節について、7つの声調が存在する。それぞれの調値は、次の通りである(p. 40)。原文の方式に従い、下線によって、短調を示す。原文と同じ例字を付記する。

陰平：44

剛, 知, 專, 尊, 丁, 辺

陽平：13

窮, 陳, 床, 才, 唐, 平

陰上：52

古, 展, 紙, 走, 短, 比

陰去 : 412

蓋, 帳, 正, 酔, 対, 変

陽去 : 31

五, 女, 近, 柱, 共, 陣

陰入 : 55

各, 卓, 急, 竹, 黒, 識

陽入 : 23

岳, 入, 六, 合, 舌, 俗

2音節群のデータを挙げる (pp. 41-42)。原文に、若干の整理を加えた。以下、語例は省略する。

2音節群応用式変調

第1音節 第2音節

陰平	舒声	44 21
	促声	44 <u>22</u>
陽平	舒声	A 22 44, B 23 21
	促声	A 22 <u>44</u> , B 23 <u>22</u>
陰上	舒声	A 52 34, B 52 21, C 44 21
	促声	A 52 <u>44</u> , B 52 <u>22</u> , C 44 <u>22</u>
陰去	陰平	A 44 21, B 52 34
	陽平	同上
	陰上	同上
	陰去	A 44 21, B 52 34, C 52 21
	陽去	同上
	促声	A 44 <u>22</u> , B 52 <u>44</u>
陽去	陽平	A 22 44, B 23 21
	陰平	A 22 44, B 23 21, C 44 21
	陰上	同上
	陰去	同上
	陽去	同上
	促声	A 22 <u>44</u> , B 23 <u>22</u>
陰入	陰平	<u>55</u> 34
	陽平	同上
	陰上	A <u>55</u> 34, B <u>55</u> 52
	陰去	A <u>55</u> 34, B <u>55</u> 52, C <u>55</u> 412

	陽去	同上
	促声	<u>55</u> <u>55</u>
陽入	舒声	A <u>33</u> <u>52</u> , B <u>22</u> <u>44</u>
	陰入	A <u>33</u> <u>55</u> , B <u>22</u> <u>55</u>
	陽入	A <u>33</u> <u>55</u> , B <u>22</u> <u>44</u>

次の3つは、「少数の2音節群に用いられるだけである」という (p. 42, 注1)。

(a) 陰上を第1音節とするC式

(b) 陽去を第1音節とするC式

(c) 陰入を第1音節とし陰上を第2音節とするA式

また、陽平、陽去、陽入を第1音節とするB式も、「用例が限られている」とのことである (p. 42, 注1)。

さらに、第2音節の44は、「ゆっくり発音されると、ひとによっては」53になるという (p. 42, 注2)。

3音節群のデータを挙げる (pp. 42-44)。

3音節群応用式変調

第1音節 第2音節

陰平		44 44 21
陽平		22 55 21
陰上		A 52 34 21, B 44 44 21, C 52 22 21
陰去		A 44 44 21, B 52 34 21
陽去		A 22 55 21, B 23 33 21
陰入	陰平	<u>55</u> 34 21
	陽平	同上
	陰上	A <u>55</u> 34 21, B <u>55</u> 52 34, C <u>55</u> 52 21
	陰去	同上
	陽去	同上
	促声	<u>55</u> <u>55</u> 21
陽入	舒声	<u>33</u> 52 21
	促声	<u>33</u> <u>55</u> 21

原文の方式に従い、第2音節以降については、促声の調値を、舒声の調値で代表させた。

「入声の変調はすべて短平調である」との記述がある (p. 44, 注2)。したがって、次の対応が存在することになる。

55 : 55, 44 : 44, 33 : 33, 22 : 22

また、次の2つの対応が、明記されている (p. 44, 注2)。

34 : 44, 21 : 22

4音節以上の場合については、舒声の調値と促声の調値の対応に関して、記述がない。しかし、同じ対応が成り立つものと推定する。

2音節群に対しては、促声の調値を舒声の調値で代表させる処理が、施されていない。この処理は、§2.1の冒頭で、本稿の側において行う。

4音節群のデータを挙げる (pp. 45-46)。

4音節群広用式変調

第1音節 第2音節

陰平		44 44 33 21
陽平		22 55 44 21
陰上		A 52 34 44 21, B 44 44 33 21
陰去		A 52 34 44 21, B 44 44 33 21
陽去		A 22 55 44 21, B 44 44 33 21
陰入	舒声	<u>55</u> 34 44 21
	促声	<u>55</u> <u>55</u> 44 21
陽入	舒声	A <u>33</u> 52 33 21, B <u>22</u> 34 44 21
	促声	<u>33</u> <u>55</u> 33 21

陰上、陽去、陽入の各B式の用例は、「比較的少数である」という (p. 46)。

5音節群については、「第1, 2, 3, 5音節がそれぞれ4音節群広用式の連読変調の各型と同じで、第4音節は中平調に発音する」(p. 47)という記述がある。しかし、例が2つ挙げられているに過ぎない。4音節以下の場合と異なり、全面的な提示はない。そこで、この記述に従い、4音節群までと同様の形式により、本稿の側において、表を作成する。

4音節群の音調にA, Bの区別がある場合について、5音節群における区別の有無に関しては、記述がない。これについては、4音節群の状況を、機械的に写した。したがって、現実には、A, Bの区別の存在しない可能性もある。

5音節群広用式変調

第1音節 第2音節

陰平		44 44 33 33 21
陽平		22 55 44 33 21
陰上		A 52 34 44 33 21, B 44 44 33 33 21
陰去		A 52 34 44 33 21, B 44 44 33 33 21
陽去		A 22 55 44 33 21, B 44 44 33 33 21
陰入	舒声	<u>55</u> 34 44 33 21
	促声	<u>55</u> <u>55</u> 44 33 21

陽入 舒声 A 33 52 33 33 21, B 22 34 44 33 21
 促声 33 55 33 33 21

6音節以上から成る音節群の音調については、記述がない。よって、5音節群の場合と同じ法則性が成り立つものと推定する。次の通りである。

6音節以上の音節群の応用式変調

第1音節、第2音節、第3音節、最終音節の調値は、それぞれ、4音節群応用式変調の第1音節、第2音節、第3音節、第4音節の調値に等しい。その他の音節は、中平調（すなわち、当該音節の調類の舒声・促声に応じて、33または33）である。

2 分析（応用式変調）

2.1

以下、応用式変調の分析を行う。

§1で述べた通り、宮田一郎等(1984)は、2音節群について、促声の調値を舒声の調値で代表させる処理を、施していない。まず、この処理を行う。次のようになる (§1でデータとして挙げたときとは、一部、配列が異なる)。第1音節が促声の場合、第2音節における、舒声の調値と促声の調値の対応が、§1で述べた対応に含まれていないことが多い。よって、念のため、一律に、処理を行わないままにしておく。

第1音節	第2音節	
陰平		44 21
陽平		A 22 44, B 23 21
陰上		A 52 34, B 52 21, C 44 21
陰去	陰平	A 44 21, B 52 34
	陽平	同上
	陰上	同上
	促声	同上
	陰去	A 44 21, B 52 34, C 52 21
	陽去	同上
陽去	陽平	A 22 44, B 23 21
	促声	同上
	陰平	A 22 44, B 23 21, C 44 21
	陰上	同上
	陰去	同上

	陽去	同上
陰入	陰平	<u>55</u> 34
	陽平	同上
	陰上	A <u>55</u> 34, B <u>55</u> 52
	陰去	A <u>55</u> 34, B <u>55</u> 52, C <u>55</u> 412
	陽去	同上
	促声	<u>55</u> <u>55</u>
陽入	舒声	A <u>33</u> 52, B <u>22</u> 44
	陰入	A <u>33</u> <u>55</u> , B <u>22</u> <u>55</u>
	陽入	A <u>33</u> <u>55</u> , B <u>22</u> <u>44</u>

この整理の結果、2音節群に存在する音調の型は、次の14種となる。調類との関係を付記する（調類を表現する記号などについては、直後で述べる）。

2音節群の音調の型

44 21	1 x, 3 xC, 5 xA, 6[1356]C
22 44	2 xA, 6 xA
23 21	2 xB, 6 xB
52 34	3 xA, 5 xB
52 21	3 xB, 5[56]C
<u>55</u> 34	7[12], 7[356]A
<u>55</u> 52	7[356]B
<u>55</u> 412	7[56]C
<u>55</u> <u>55</u>	7[78]
<u>33</u> 52	8[12356]A
<u>22</u> 44	8[12356]B
<u>33</u> <u>55</u>	8[78]A
<u>22</u> <u>55</u>	87 B
<u>22</u> 44	88 B

慣例により、調類を、1以上8以下の整数で表示する。次の通りである。

- 1 : 陰平, 2 : 陽平, 3 : 陰上,
5 : 陰去, 6 : 陽去, 7 : 陰入, 8 : 陽入

例えば、調類の表示87は、第1音節が8（すなわち、陽入。以下同様）であり、第2音節が7であることを示す。8[12356]は、第1音節が8で、第2音節が1, 2, 3, 5, 6のいずれかであることを示す。3xは、第1音節が3で、第2音節は任意であることを示す。すなわち、3xは、（蘇州方言においては）3[1235678]と同じことである。

英字のxを用いた表示法は、一般に行われている(乗算記号の×が用いられることもある)。ただし、例えば、3xが、「第1音節が3で第2音節以降が任意である、2以上の任意の音節数から成る音節群」を示す場合もある。そのような用法は、本稿の用法と異なる。

8[78]A, 87Bなどにおける、末尾のA, B, Cは、§1で示した原文のデータに付されているものを、そのまま写した。

3音節以上の場合について、同様に、音調の型を示し、調類との関係を付記する。

3音節群の音調の型

- 44 44 21 1x, 3xB, 5xA
- 22 55 21 2x, 6xA
- 23 33 21 6xB
- 52 34 21 3xA, 5xB
- 52 22 21 3xC
- 55 34 21 7[12]x, 7[356]xA
- 55 55 21 7[78]x
- 55 52 34 7[356]xB
- 55 52 21 7[356]xC
- 33 52 21 8[12356]x
- 33 55 21 8[78]x

4音節群の音調の型

- 44 44 33 21 1x, 3xB, 5xB, 6xB
- 22 55 44 21 2x, 6xA
- 52 34 44 21 3xA, 5xA
- 55 34 44 21 7[12356]x
- 55 55 44 21 7[78]x
- 33 52 33 21 8[12356]xA
- 22 34 44 21 8[12356]xB
- 33 55 33 21 8[78]x

5音節群の音調の型

- 44 44 33 33 21 1x, 3xB, 5xB, 6xB
- 22 55 44 33 21 2x, 6xA
- 52 34 44 33 21 3xA, 5xA
- 55 34 44 33 21 7[12356]x
- 55 55 44 33 21 7[78]x
- 33 52 33 33 21 8[12356]xA

22 34 44 33 21 8[12356]xB

33 55 33 33 21 8[78]x

2.2

岡田(1995)の上海方言の分析においては、単独の1音節の音調と、2音節以上の音節群の音調とを、一括して扱った。しかし、蘇州方言については、明らかに、この扱いをすることができない(例えば、陽平と陽去の挙動が、2音節以上の場合には明確に分かれず、単独の1音節の場合にのみ明確に分かれるという事実がある)。

そして、単独の1音節の音調は、本稿の目的から見て、与えられたデータのまま、放置しておかざるを得ない。何らかの分析を加えるという性質のものではない。そのため、以後は、1音節の場合を除外して考える。2音節以上の音節群から構成される音調体系を、単に、「音調体系」「体系」などと称する。

蘇州方言の場合、この措置を取っても、上海方言とは異なり、音調体系の全体を単語声調体系として捉えることが、困難である。そこで、4音節以上の音節群の音調に着目し、調類との関係を考慮に入れて、体系を、次のように整理する。

単語声調 1

44 21, 44 44 21, 44 44 33 21, 44 44 33 33 21

単語声調 2

22 44, 22 55 21, 22 55 44 21, 22 55 44 33 21

単語声調 2 変種 1

23 21, 23 33 21

単語声調 3

52 34, 52 34 21, 52 34 44 21, 52 34 44 33 21

55 34, 55 34 21, 55 34 44 21, 55 34 44 33 21

55 55, 55 55 21, 55 55 44 21, 55 55 44 33 21

単語声調 3 変種 1

52 21, 52 22 21

単語声調 3 変種 2

55 52, 55 52 34

単語声調 3 変種 3

55 52 21

単語声調 3 変種 4

55 412

単語声調 4

33 52, 33 52 21, 33 52 33 21, 33 52 33 33 21

33 55, 33 55 21, 33 55 33 21, 33 55 33 33 21

単語声調 5

22 44, 22 34 44 21, 22 34 44 33 21

22 44

単語声調 5 変種 1

22 55

単語声調の変種という考え方を、導入した。

以後、単に「単語声調 n 」(n は 1, 2, 3 等)と言うとき、それは、文字通りの単語声調 n (すなわち、変種でないもの)のみを指す。単語声調 n と、単語声調 n 変種 1, 単語声調 n 変種 2, 単語声調 n 変種 3 等を、包括して言う必要があるときは、それに応じた表現を用いる。

単語声調 3 には、3つの系列が含まれている。1行目の系列を、基本的な型と考える。第1音節が舒声の場合に、この系列が生ずる。第1音節が促声であって、第2音節が舒声ならば、2行目の系列となる。第1音節と第2音節が、いずれも促声ならば、3行目の系列となる。

2行目と3行目の系列は、促声の存在によって生じたことが、明白である。「変種」とは、性質が異なる。しかし、舒声の調値によって促声の調値を代表させる措置では、扱えない。対応が、次のようになっているからである。

52 : 55, 34 : 55

この事項を扱うには、専用の規則を設定することが考えられる。ここでは、細部に立ち入らない。何らかの規則が設定されたものとみなす。以後、3つの系列を総称して、単に、「単語声調 3」と呼ぶ。また、以後、単語声調 3 の音調としては、1行目の系列の音調のみを考える。

単語声調 4 には、2つの系列が存在する。第2音節が促声の場合に、2行目の系列が生ずる。これについても、単語声調 3 と同様の措置を取る。調値の対応は、前記の単語声調 3 の場合の対応に、含まれている。

単語声調 5 の 2 行目の系列 (2 音節群の、ただ 1 つの型から成る) は、若干、性質が異なる。§ 2.1 の冒頭において、2 音節群の第 2 音節につき、促声の調値を舒声の調値で代表させる措置を取った。その際、第 1 音節が促声の場合を、一律に、除外した。ゆえに、この型が、残存する結果となった。この型は、実際には、44 : 44 という通常の対応で処理できる。実質的には、別系列を構成しない。

単語声調 (変種を含む) と調類との関係を、次にまとめておく。5 音節以上の場合については、調類と各音調型の関係の詳細に関し、宮田一郎等(1984)に記述がない。よって、

4音節以下の場合のみを対象とする。宮田一郎等(1984)において、「少数である」「比較的少数である」「用例が限られている」のいずれかの注記のあるものについては、「(少数)」と付記した。3音節群に関しては、原文に、その種の注記がない。よって、この付記は、2音節群と4音節群に限られる。

単語声調と調類の関係

単語声調1

4音節群：1x, 3xB (少数), 5xB, 6xB (少数)

3音節群：1x, 3xB, 5xA

2音節群：1x, 3xC (少数), 5xA, 6[1356]C (少数)

単語声調2

4音節群：2x, 6xA

3音節群：2x, 6xA

2音節群：2xA, 6xA

単語声調2 変種1

3音節群：6xB

2音節群：2xB (少数), 6xB (少数)

単語声調3

4音節群：3xA, 5xA, 7x

3音節群：3xA, 5xB, 7[12]x, 7[356]xA, 7[78]x

2音節群：3xA, 5xB, 7[12], 7[356]A (73Aは少数), 7[78]

単語声調3 変種1

3音節群：3xC

2音節群：3xB, 5[56]C

単語声調3 変種2

3音節群：7[356]xB

2音節群：7[356]B

単語声調3 変種3

3音節群：7[356]xC

単語声調3 変種4

2音節群：7[56]C

単語声調4

4音節群：8[12356]xA, 8[78]x

3音節群：8x

2音節群：8xA

単語声調 5

4 音節群：8[12356]xB (少数)

2 音節群：8[12356]B (少数), 88 B (少数)

単語声調 5 変種 1

2 音節群：87 B (少数)

同じ情報を、第 1 音節の調類によって、整理する。次のようになる。

調類と単語声調の関係

第 1 音節が陰平のとき

単語声調 1

第 1 音節が陽平のとき

4 音節群：単語声調 2

3 音節群：単語声調 2

2 音節群：単語声調 2, 同変種 1 (少数)

第 1 音節が陰上のとき

4 音節群：単語声調 3, 単語声調 1 (少数)

3 音節群：単語声調 3, 同変種 1, 単語声調 1

2 音節群：単語声調 3, 同変種 1, 単語声調 1 (少数)

第 1 音節が陰去のとき

4 音節群：単語声調 3, 単語声調 1

3 音節群：単語声調 3, 単語声調 1

2 音節群：単語声調 3, 同変種 1 (第 2 音節が去声のとき),
単語声調 1

第 1 音節が陽去のとき

4 音節群：単語声調 2, 単語声調 1 (少数)

3 音節群：単語声調 2, 同変種 1

2 音節群：単語声調 2, 同変種 1 (少数),
単語声調 1 (少数。第 2 音節が陰平, 陰上, 陰去, 陽去のいずれかのとき)

第 1 音節が陰入のとき

4 音節群：単語声調 3

3 音節群：単語声調 3,

同変種 2, 同変種 3 (以上 2 件は、第 2 音節が、陰上, 陰去, 陽去のいずれかのとき)

2 音節群：単語声調 3 (第 2 音節が陰上のときは少数), 同変種 2,

同変種 4 (第 2 音節が去声のとき)

第 1 音節が陽入のとき

4 音節群: 単語声調 4, 単語声調 5 (少数)

3 音節群: 単語声調 4

2 音節群: 単語声調 4,

単語声調 5 (少数。第 2 音節が陰入以外のとき),

同変種 1 (少数。第 2 音節が陰入のとき)

2.3

以下, 定式化を行う。手順は, 岡田(1995)で扱った上海方言の場合と, 同じである。「音調パターンの概形」に縮約を適用し, さらに, 表層規則を適用して, 表層の音調を導く。

各変種については, 定式化を行わない。変種どうしの関係や, 変種と非変種の関係についても, 考察しない。

定式化の対象とする体系は, 次の通りである。

定式化の対象とする音調体系

単語声調 1

44 21, 44 44 21, 44 44 33 21, 44 44 33 33 21

単語声調 2

22 44, 22 55 21, 22 55 44 21, 22 55 44 33 21

単語声調 3

52 34, 52 34 21, 52 34 44 21, 52 34 44 33 21

単語声調 4

33 52, 33 52 21, 33 52 33 21, 33 52 33 33 21

単語声調 5

22 44, 22 34 44 21, 22 34 44 33 21

音調パターンの概形を, 次のように設定する。

音調パターンの概形

単語声調 1

44 33, 44 44 33, 44 44 33 33, 44 44 33 33 33

単語声調 2

22 55, 22 55 33, 22 55 44 33, 22 55 44 33 33

単語声調 3

52 34, 52 34 33, 52 34 44 33, 52 34 44 33 33

単語声調 4

33 52, 33 52 33, 33 52 33 33, 33 52 33 33 33

単語声調 5

22 34, 22 34 33, 22 34 44 33, 22 34 44 33 33

単語声調 5 の 3 音節群のパターンは、実際には、存在しない。しかし、縮約の操作の必要上、仮想的なパターンとして、設定する。

基本音調パターンを、次のように定める。

基本音調パターン

単語声調 1 : 44 44 33 …

単語声調 2 : 22 55 44 33 …

単語声調 3 : 52 34 44 33 …

単語声調 4 : 33 52 33 …

単語声調 5 : 22 34 44 33 …

単語声調 1 において、3 音節以上の音節群の音調パターン (の概形。以下同様) は、基本音調パターンに適合する。よって、縮約の適用はない。2 音節群の音調パターンは、3 音節群の音調パターンの第 2 音節の除去によって得られる。次の通りである。

単語声調 1 における縮約

44 44 33 → 44 33

単語声調 2, 単語声調 3, 単語声調 5 において、4 音節以上の音節群の音調パターンは、基本音調パターンに適合する。3 音節群の音調パターンは、いずれも、4 音節群の音調パターンの第 3 音節の除去によって得られる。2 音節群の音調パターンは、いずれも、3 音節群の音調パターンの第 3 音節の除去によって得られる。次の通りである。

単語声調 2 における縮約

22 55 44 33 → 22 55 33 → 22 55

単語声調 3 における縮約

52 34 44 33 → 52 34 33 → 52 34

単語声調 5 における縮約

22 34 44 33 → 22 34 33 → 22 34

単語声調 4 については、縮約の適用がない。単語声調 4 の 2 音節群の音調は、基本音調パターンに適合していないようにも見える。しかし、実際には、適合している。音調パターンの直観的な表現の限界が、ここに存する。

表層規則として、次の 3 つを設定する。適用順序は、任意である。

表層規則 1

最終音節の調値が 33 ならば、21 に変える。

表層規則 2

単語声調 2 の 2 音節群の第 2 音節の調値を、55 から 44 に変える。

表層規則 3

単語声調 5 の 2 音節群の第 2 音節の調値を、34 から 44 に変える。

表層規則の適用状況を、岡田(1995: 152)と同様の形式で、次に示す。「phase 1」の行に示したものが、音調パターンの概形である。縮約は、すでに適用されている。「rule 1」「rule 2」「rule 3」の行の音調パターンが、それぞれ、表層規則 1、表層規則 2、表層規則 3 の適用直後の音調パターンである。

単語声調 1

phase 1 44 33 44 44 33 44 44 33 33 44 44 33 33 33
rule 1 44 21 44 44 21 44 44 33 21 44 44 33 33 21

単語声調 2

phase 1 22 55 22 55 33 22 55 44 33 22 55 44 33 33
rule 1 22 55 21 22 55 44 21 22 55 44 33 21
rule 2 22 44

単語声調 3

phase 1 52 34 52 34 33 52 34 44 33 52 34 44 33 33
rule 1 52 34 21 52 34 44 21 52 34 44 33 21

単語声調 4

phase 1 33 52 33 52 33 33 52 33 33 33 52 33 33 33
rule 1 33 52 21 33 52 33 21 33 52 33 33 21

単語声調 5

phase 1 22 34 22 34 44 33 22 34 44 33 33
rule 1 22 34 44 21 22 34 44 33 21
rule 3 22 44

以上で、応用式変調の分析を、終了する。

3 データ (窄用式変調)

上海方言と同じく、蘇州方言にも、窄用式変調が存在する。そして、蘇州方言の窄用式変調も、応用式変調と(したがって、単語声調の現象と)独立の現象であると考えられる。よって、本来は、取り上げる必要がない。

しかし、蘇州方言の窄用式変調には、形式面で、上海方言の窄用式変調との類似が見られる。これは、1つの興味深い事項であると考えられる。そのため、蘇州方言についても、窄用式変調を取り上げる。

以下、応用式変調の場合と同じく、宮田一郎等(1984: 39-49)の記述に基づいて、データを提示する。

2音節群については、「まえの音節の変調はつぎのようになる」として、次の調値が示されている(p. 42)。「まえの音節」は、明らかに、2音節群の第1音節を指している。

陰平：44

陽平：33

陰上：53

陰去：53

陽去：33

陰入：55

陽入：22

原文では、陽入の調値22に、下線がない。これは、誤植であると思われる。本稿の側において、下線を補った。

以後、「2音節群窄用式変調の第1音節の調値」として、上記の調値に、しばしば言及する。

2音節群の第2音節については、「あとの音節は、本来の声調に発音する」と記されている(p. 42)。

3音節群については、3つの場合が存在する。それぞれ、「窄A式」「窄B式」「窄C式」と名付けられている。次の記述がある(p. 44)。

窄A式は前1後2と連読、窄B式は前2後1と連読、窄C式は前1中1後1と連読される場合の調型である。

原文の記述(pp. 44-45)に基づいて、それぞれの調値を示す(適宜、原文の表現を修正した。各式に対する「1+2」等の注記は、原文のものを、そのまま記した)。

窄A式(1+2)

第1音節の調値は、2音節群窄用式変調の第1音節の調値に等しい。第2音節、第3音節は、2音節群応用式変調に従う(すなわち、それぞれ、2音節群応用式変調の第1音節、第2音節の調値に等しい。以下同様)。

窄B式(2+1)

第1音節の調値は、2音節群応用式変調の第1音節の調値に等しい。第2音節は、中平調(舒声ならば33、促声ならば33。以下同じ)である。第3音節には、変調が生じない。

窄C式(1+1+1)

第1音節及び第2音節の調値は、2音節群窄用式変調の第1音節の調値に等しい。第3音節には、変調が生じない。

4 音節群について、同様に、原文の記述 (pp. 46-47) に基づいて、調値を示す。

窄A式 (2 + 2)

第1音節の調値は、2音節群広用式変調の第1音節の調値に等しい。第2音節は、中平調である。第3音節、第4音節は、2音節群広用式変調に従う。

窄B式 (3 + 1)

第1音節、第2音節は、それぞれ、3音節群広用式変調の第1音節、第2音節の調値に等しい。第3音節は、中平調である。第4音節には、変調が生じない。

窄C式 (2 + 1 + 1)

第1音節の調値は、2音節群広用式変調の第1音節の調値に等しい。第2音節は、中平調である。第3音節の調値は、2音節群窄用式変調の第1音節の調値に等しい。第4音節には、変調が生じない。

窄D式 (1 + 1 + 1 + 1)

第1音節、第2音節、第3音節の調値は、いずれも、2音節群窄用式変調の第1音節の調値に等しい。第4音節には、変調が生じない。

5音節群の窄用式変調についての、原文の記述 (p. 48) には、疑問がある。そのため、分析に際しては、5音節群の記述を、考慮に入れない。この問題については、§4.3で述べる。

6音節以上の場合については、調値などに関する具体的な記述がない。

結局、窄用式変調については、4音節以下のデータに依拠することとなる。

4 分析 (窄用式変調)

4.1

蘇州方言の窄用式変調の分析を行う。

すでに、岡田(1995: 155-161)において、上海方言の窄用式変調の分析を行った。蘇州方言についても、分析の手法は、同じである。

まず、上海方言の場合と同じく(岡田(1995: 156)参照)、広用式変調の生ずる領域として、「広用式変調領域」を定める。同様に、窄用式変調の生ずる領域を、「窄用式変調領域」と呼ぶ。窄用式変調領域は、1つ以上の広用式変調領域から成る。窄用式変調の直接の対象は、窄用式変調領域を構成する各広用式変調領域である。

例えば、宮田一郎等(1984: 44)によると、「買物事」は、3音節群窄A式(1 + 2)に従う(「物事」は、普通話の「東西」に当たる。葉祥苓(1993: 265))。したがって、「買」「物事」が、それぞれ、広用式変調領域を成す。その2つの広用式変調領域が、1つの窄用式変調領域を成す。すなわち、次のような構成である。

[[買] [物事]]

§3で引用した、宮田一郎等(1984: 44)の「窄A式は前1後2と連読」という記述は、このことを意味している。その他の、同種の記述についても、同様である。

次に、やはり上海方言の場合と同じく(岡田(1995: 156-157)参照)、「変調1」「変調2」の2種類を設ける。次の通りである。

変調1

当該広用式変調領域の最終音節の調値を、その調類に従って、次のように変える。

舒声：33

促声：33

変調2

1音節から成る広用式変調領域において、当該音節の調値を、その調類に従って、次のように変える。

陰平：44

陽平：33

陰上：53

陰去：53

陽去：33

陰入：55

陽入：22

変調1が、「中平調」である。変調2が、「2音節群窄用式変調の第1音節の調値」である。

変調1と変調2により、蘇州方言の窄用式変調を、下記のように定式化する。窄用式変調は、広用式変調領域に作用する。よって、下記に限り、簡素化のため、窄用式変調領域を構成する各広用式変調領域を、単に、「領域」と呼ぶ。

窄用式変調

- (a) 領域が窄用式変調領域の末尾にあるときは、変調が生じない。
- (b) 領域が窄用式変調領域の末尾にないとき、
 - (i) 当該領域が2音節以上ならば、変調1となる。
 - (ii) 当該領域が1音節ならば、変調2となる。

以上が、蘇州方言の窄用式変調の分析である。

4.2

蘇州方言と上海方言の窄用式変調の対照を試みる。

両方言の変調1の内容は、完全に一致する。いずれも、「中平調」である。変調2の内容は、一致しない。上海方言の変調2は、次のようなものであった(岡田(1995: 157))。

上海方言の変調2

1音節から成る広用式変調領域において、当該音節の調値を、その調類に従って、次のように変える。

陰平：44

陰去：44

陽去：33

陰入：44

陽入：22

そもそも、両方言は、調類の数が異なる。上海方言は5であり、蘇州方言は7である。変調2の内容を比べること自体、あまり意味がない。

ところが、変調2の内容の相違を問わないこととして、窄用式変調の形式面のみに着目すると、両方言の間に、類似が見られる。

上海方言の窄用式変調は、次のように定式化される(岡田(1995: 157))。

上海方言の窄用式変調

(a)領域が窄用式変調領域の末尾にあるときは、変調が生じない。

(b)領域が窄用式変調領域の末尾にないとき、

(i) 当該領域が2音節以上ならば、変調1となる。

(ii) 当該領域が1音節ならば、(A)2音節以上から成る領域の直後にあるとき、変調1となる。(B)それ以外のとき(すなわち、1音節から成る領域の直後にあるとき、または、窄用式変調領域の先頭にあるとき)、変調2となる。

両方言の違いは、(bii)のみに存する。上海方言では、(bii)が、(A)、(B)に分かれている。蘇州方言では、それが分かれていない。

すなわち、上海方言では、条件によって、1音節の領域に、変調2のみならず、変調1も生ずる。蘇州方言では、そのようなことがない。蘇州方言において、1音節の領域に窄用式変調が生ずるならば、それは、変調2に限られる。

この相違点を除けば、両方言の窄用式変調は、具体的な調値が一致しないにもかかわらず、同一の形式を有する。

なお、以上の、両方言の対照に際しては、許宝華・湯珍珠(1988)(及び、それに基づく岡田(1995)の分析)によって、上海方言の窄用式変調に言及した。しかし、宮田一郎等(1984)自体も、上海方言の窄用式変調を扱っている。

許宝華・湯珍珠(1988)と宮田一郎等(1984)のデータの間には、「窄A式」等の型の認定に

ついて、相違が存在する。許宝華・湯珍珠(1988: 38)は、4音節群窄E式として、1+3という型を認定している。宮田一郎等(1984)は、これに対応する型を、認定していない。1+4である5音節群窄F式(許宝華・湯珍珠(1988: 40))に対応する型も、宮田一郎等(1984)には、存在しない。

宮田一郎等(1984)が認定している許宝華・湯珍珠(1988)が認定していない型というのは、存在しない。したがって、宮田一郎等(1984)の認定する型の全体は、許宝華・湯珍珠(1988)の認定する型の全体に、含まれる。

なお、両者が認定している型であっても、その型に割り当てる英字(「窄A式」における「A」等)に、相違の存在する場合がある。言うまでもなく、これは、実質的な相違ではない。

窄用式変調の調値について、許宝華・湯珍珠(1988)と宮田一郎等(1984)の間に、不一致はない。

4.3

§3の末尾で述べた、宮田一郎等(1984: 48)における5音節群の窄用式変調の記述の問題を、取り上げる。

その記述は、次の通りである(「ABCDEの5型」となっているが、§4.2の末尾で述べた通り、岡田(1995)が依拠した許宝華・湯珍珠(1988)のデータには、6つの型が存在する。しかし、この事項は、以下の議論に、影響を及ぼさない)。

5音節群窄用式は上海語の5音節群窄用式と同じように、ABCDEの5型があり、変調方式も上海語と同じである。ただし、調値は蘇州語による。

§4.2で述べた通り、蘇州方言の4音節以下の音節群の窄用式変調について、変調方式が上海方言と同じであるとは言えない。したがって、この記述を、文字通りに受け取るならば、蘇州方言の窄用式変調について、次のような事態が存在することになる。

4音節以下の音節群は、上海方言と異なる変調方式に従う。5音節群は、上海方言と同じ変調方式に従う。

これは、不自然であるように思われる。5音節(以上)の場合についても、4音節以下と同じ法則性が成り立つ方が、自然である。

そこで、仮に、「調値は蘇州語による」という記述に、次の内容も含まれていると解釈してみる。

蘇州方言における1音節の領域は、上海方言の場合に変調1となる条件下においても、変調2になる。

そのように解釈すれば、4音節以下の場合に成り立った法則性が、5音節(以上)の場合にも、成り立つこととなる。したがって、不自然さは、解消される。

しかし、この解釈を取ると、「調値は蘇州語による」という記述の中に、窄用式変調のほぼ全内容が盛り込まれていることになる。その結果、「変調方式も上海語と同じである」という記述における「変調方式」が、ほとんど内容のないものとなる。したがって、わざわざ、「変調方式も上海語と同じである」と述べることで、無意味に近くなる。よって、この解釈を取るとは、困難である。

いずれにしても、本稿では、宮田一郎等(1984: 48)の5音節群窄用式の記述について、疑問点を指摘するのみとする。そのため、分析に際しては、この記述を考慮に入れないこととした。

なお、言うまでもなく、「不自然である」というのは、主観的な感想に過ぎない。宮田一郎等(1984: 48)の記述の通りの事態が生じている可能性も、もちろん、否定できない。

4.4

Ballard(1987, 1988)は、蘇州方言の連読変調を、対象の1つとして扱っている。そして、蘇州方言の窄用式変調について、“a right focus/dominant phenomenon” (Ballard(1987: 10)), “the exact reverse in dominance from regular lexical sandhi” (Ballard(1988: 45))などと述べている(後者における“regular lexical sandhi”は、明らかに、広用式変調を指している。広用式変調については、“left dominant tone sandhi” (p. 44)としている)。

窄用式変調についての、この性格付けは、妥当なものとは思われない。

Ballard(1987, 1988)が、これらの観察の根拠としているのは、蘇州方言の2音節群の窄用式変調のみに過ぎない(そのデータは、宮田一郎等(1984)と一致する)。

§4.1で示した通り、上海方言の窄用式変調と同じく、蘇州方言の窄用式変調も、「末尾以外の各広用式変調領域において、当該領域の最終音節の調値の交替を引き起こす」という現象である。

2音節群の窄用式変調も、当然、これに従う。2音節群の場合、第1音節と第2音節が、それぞれ、窄用式変調の対象たる広用式変調領域を成す。第2の広用式変調領域(当該2音節群の第2音節のみから成る)は、末尾にある。したがって、当該領域に、変調は生じない。第1の広用式変調領域の最終音節(かつ、この場合、唯一の音節)たる、当該2音節群の第1音節のみに、変調が生ずる。

この結果のみを見ると、第1音節に変調が生じ、第2音節に変調が生じていない。したがって、2音節群の窄用式変調のみを対象とするならば、“a right focus/dominant phenomenon”という観察も、生まれる。

しかし、3音節以上のデータを参照すれば、このような観察は生じ得ない。変調の生ずる音節が、第1音節のみであるという事実(すなわち、末尾以外の音節であるという事実)

は、2音節群の場合の、偶然の事象に過ぎない。

ここでの議論においては、「広用式変調領域」という用語を使用した。この用語は、岡田(1995: 156)で定めたものに過ぎない。一般に流通しているものではない。しかし、いかなる立場の分析であっても、窄用式変調を適切に捉えるためには、「広用式変調領域」に対応する概念を、使用せざるを得ない。よって、ここでの議論は、特定の立場にしか通用しないものではない。

なお、Ballard(1987, 1988)の真意について、「3音節以上に関して、何かを述べる意図はなく、2音節群の窄用式変調のみを対象として、その性格付けを行ったに過ぎない」と解釈することも、可能ではある。しかし、仮に、真意がそうであるならば、対象を2音節群に限定するという態度自体が、不適切である。Ballard(1987, 1988)は、宮田一郎等(1984)など、3音節以上のデータが与えられている論考に依拠していることを、明言しているからである。

また、同じく、Ballard(1987, 1988)の真意に関連して、right dominantという術語を、大幅に拡大解釈し、末尾以外の各広用式変調領域が窄用式変調の対象であるということをも含めるならば、窄用式変調をright dominantと称することも、不可能ではない。しかし、そのような拡大解釈には、かなり無理がある。通常、right dominant, left dominantという術語は、音節を単位とするものだからである。また、Ballard(1987, 1988)が、そのような拡大解釈を念頭に置いているとは、考えにくい。もし、そうであるならば、そのことについての説明が、不十分である。

したがって、いずれにしても、Ballard(1987, 1988)における窄用式変調の記述には、不適切な点が、存在する。

参考文献

- Ballard, W. L. (1987) Tone sandhi in Xu Baohua's Wu dialect area I. *Computational Analyses of Asian and African Languages* 28. 1-23.
- Ballard, W. L. (1988) Distribution and historical significance of varying tone sandhi types in South China. *Computational Analyses of Asian and African Languages* 30. 43-56.
- 宮田一郎・許宝華・銭乃荣(編著)(1984)『普通話対照 上海語・蘇州語—学習と研究』光生館。
- 岡田英俊(1995)「単語声調体系の定式化(2) —上海方言—」『金沢大学教養部論集 人文科学編』32(2). 141-161.
- 許宝華・湯珍珠(主編)(1988)『上海市区方言志』上海: 上海教育出版社。
- 葉祥苓(編纂)(1993)『蘇州方言詞典』南京: 江蘇教育出版社。

[前稿(岡田(1995))の誤植の訂正]

142 ページ, 22 行目, 陰入の第 4 の例字

(誤) 踢 → (正) 踢